誌上行学講習会

第四課　十界の社会観

高佐日煌上人

「第四課　十界の社会観」

今までは四徳波羅密多（しとくはらみつた）についてお話し申しましたが、要するに人類全体の為の文化は除々に理想化に向けて進んでおるが、事、個人に関するとどうもはっきり解決を与えていない。いわゆる内途中であります。どうすれば我々が現在生命のある内に、此の究竟（くぎょう）の目的が成就出来るかという問題になっているのであります。

死なない生命をみつける。無苦安楽の生活をしたい。あくまでも自主自由でありたい。清浄平安な楽土に住みたい。此の四つの究竟目的（くぎょう）のであります。徳川時代の他に人生の幸福は絶対に無いのに、「いつもお金が二十両、シ十八、わしや二十、へらぬガイナ」とありますこの「いつも月夜で米のめし」というのは、いつも理想的で住みよい世の中を言っている。常に光々と清い月あかりがあり、おいしいお米のごはんが食べられる。当時のお百姓さんは自からは麦を食べお米は売って金に代えていましたにたしかに理想であったにせよ、キラキラ違いありません。経済が豊かになり、ですから清い美しい月光のもとで、ひかるおいしいごはんを食べられるよう願ったのであります。いつの場合も人間の究竟目的を言い得て妙であるということの証拠でもありましょう。

「ションガイナションガイナ」というのは、自由をを願っているが叶えられない、しょうがないなという意味ですが、逆に言えば常に自由がほしい自由がほしいという訳であります。

「おまえ十八、わしや二十」というのは、おまえはいつまでも十八才、私は二十才、これ以上年をとらない、即ち永遠の若さを生きることへの理想を含んでおります。これは即ち死なない生命を願っていることであります。「へらぬお金が二十両」というのは、つかっても決して二十両以下にならないという、つかっても経済の絶対なる安定性を言ったものであります。最近浅草の観音さまは三代将軍家光公が建てたのでありますが、米一石一両の観音さまが約七億円かけて旧態以前に復元いたしましたが、例を出して考えてみましょう。一万石で建立されたものが、只今は観音堂藍一揃って一万両で出来上ったものであります。七堂伽一つだけで七億円かかっておりますこれをみて当時の二十両がどの位の額かがわかるとおもいます。

泥棒にしても十両以上盗むと、理由の如何にかかわらず打首というこになっておりました。でからすから使っても使っても決してへらないというのは、素晴らしい経済の安定を意味していることになります。

以下次号に続く